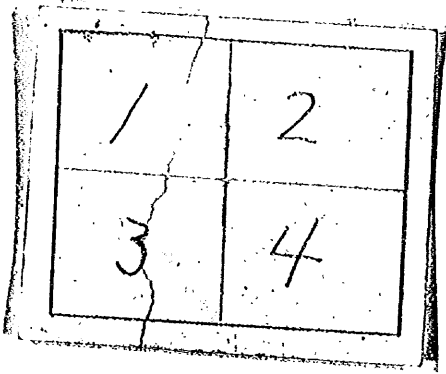


分割撮影ターゲット

分割した 部分の 撮影順序	
分割撮影 した理由	A 3 判 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	

1216
1217
1218
1219

29

63

Handwritten signature or mark

部隊原簿

第一三五師團

部隊原簿

18
30
54

第一三三市團

1210
1211
1212
1213

2

3

1210
1211
1212
1213

部隊原簿

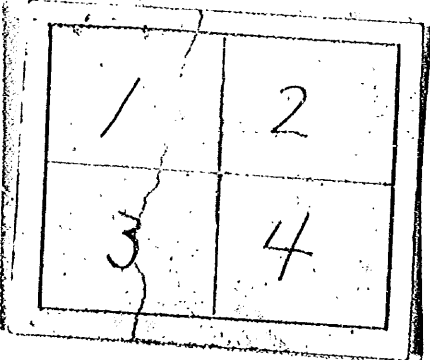
第一三五師團

部隊原簿

第一三五師團

5A

分割撮影ターゲット

分割した 部分の 撮影順序	
分割撮影 した理由	A 3 判 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	

通稱號
真心
一五二五二一〇五一郵便所名

轉入	轉出
十九年以降	十九年以降

改編經過
騎兵第三旅團
←二〇、三、二〇改組
瀋陽七七旅團
←二〇、七、二〇改組
第一三五師團

歸國は二〇、七、一〇福成
司令部を東安に至る海青鎮
以南、靉麓嶺間の營偏に任
ず歩兵部隊は鏡河、虎林、東
安、林口、工、琿、綏、
病馬廐は東安に位置す全兵
方約一万

對令部、匿養一ケ中、一節
野鹿(約三〇〇)東実ノ物
林ノ林口(ハ、一〇)一綿
糸ト移歸
ハ、一三少割綿林にて「ツ」
草取車により列布裁華され
被褥四散す
次いで司令部は被西ノ牡丹
江ノ麓處向子(ハ、一七)
モ移歸、ハ、一八横庭向子
で式發解衆

八、二一、三一の間に拉古に牧登、拉古第一大除（総理部一四名（長金清大尉）

二〇、七、一四より野重二
○聯第四中隊配屬せられあ

當時編成師團築城條
（一九、三、二六編成）の
存在は疑問、或は一時期配属
された 第四五野隊の一
部（長荒川大尉？）の誤な
らんか？

員入制編

別 冊

隱長名

開戰時

平 疑

屯

地

戦斗間の状況及損耗

終戦後の人員變動

作業大隊より

人ノ人員

滿洲殘留

116

100

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
<http://www.jacar.go.jp>

第一三三五師團司令部 通稱號 眞心一二五二五二(二二〇五一)郵便所名

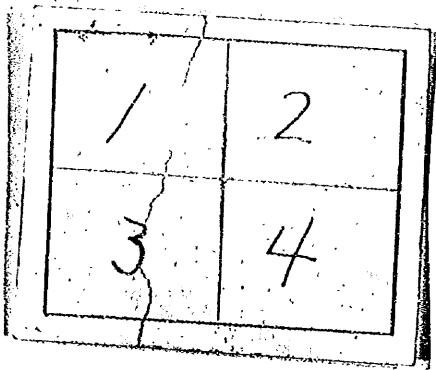
隊長名		開人	駐屯地	戦闘間の状況及損耗	終戦後の人員變動	作業大隊より入「ソ」迄の變動	入「ソ」人員	滿洲殘留	收容所	歸還人員	状況不明者數				
(内は先代を示す)		時員	平時	戰時			隊別計		收容所名	所入	死亡	滿洲より	ソ領	計	
中將 人見 興一	高級副官 少佐 吉本 駒吉		安東						イルクーツク						
大佐 井上 英助	參謀 中佐 島川 治雄		右同						ウオロシヤフ						
(附) 菅野 龍太郎			右同			八〇一(牡丹江より林口に向ふため露軍と衝突、同夜、牡丹江に陥つたため、野口少尉、千田榮少尉戦死)			カフタマロ						
代理 大尉 金清 道助			右同						ハバコフスク						
計中佐 (附) 計大尉 岡野 保	計少尉 鈴木 新太郎		右同												
計中佐 (附) 中島	計少佐 河野		右同												
計少尉 流田 茂好			右同												
中佐 齋藤 武夫	(附) 大矢忠太郎		右同			勸務小隊(長官谷津清良以下九七名)は約半量の損害あり(主として初年兵)									

臨時縣成廳開築城案
(一九、三、二六編成)の
存在は疑問、或は一時配属
された、第四五野道隊の一
部(長荒川大尉?)の誤な
らんか?

(??) 陳城集團師、威靈時座

拉古羅成第一大隊に編入
(長 金清道助)

分割撮影ターゲット

分割した 部分の 撮影順序	
分割撮影 した理由	A 3 判 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	

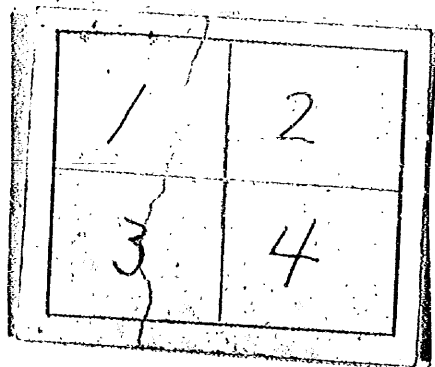
通稱號 眞心 二五二五二一〇五 郵便所名

収容 収
イルク
ロンドン
タイセツ
イマン
カッター
ハバロフ
アルク
ツク

別 隊		部 本 隊 聯		部 本 隊 大 一 第		隊 中 一 第		隊 中 二 第		隊 中 三 第			
隊 長 名	開 人	時 員	駐 屯 地	戦 斗 間 の 状 況 及 損 耗	終 戦 後 の 人 員 変 動	作 業 大 隊 よ り 入 ソ 迄 の 変 動	入 ソ 入 員	満 洲 残 留	収 容 所	所 入	死 亡	歸 還 人 員	状 況 不 明 者 数
(内は先代を示す) 大佐 飯塚 文二 (二〇、八六番任) 副官 長南 豊七 大尉 阿本 善平 副官 大瀧	平 時 戦 時	林 虎 林 虎	右 同	八、九 軍命令により七挺より代馬溝に至り第一工兵司令部の指揮下に陣地構築 八、一三 代馬溝駐、牡丹江に向ひ演習場に潜つて山中を東京城に近き八、一二四等地で武解	二〇、八 東京城にて武装解除	海林連成二三五大隊 拉古編成一三八大隊 二〇、九 東京城に於て二七七大隊 牡丹江―綏芬河―ロンドコ	除 別 計	イルタトック ロンドコ タイセツト イマン カウタマロ ハバロフスク アルクーツク	収 容 所 名	員 所 入	死 亡	満 洲 以 外 領 土 計	状 況 不 明 者 数
中尉 荒巻 隆	右 同												
中尉 老海子川五郎	右 同			第一中隊に同じ戦死一		八、二七 久田見開拓原にて海老子川大隊を編成							
中尉 高橋 善吉 (紅葉峠にて戦死)	右 同			在虎林部隊撤退の際、紅葉峠に於て退却強襲のため後援隊甲部隊と交戦高橋中尉戦死他に損害相当あるらしい									

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
<http://www.jacar.go.jp>

分割撮影ターゲット

分割した 部分の 撮影順序	
分割撮影 した理由	A 3 判 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	

部
錄
名

郵便所名

人制權

別 隊

時 戰 關
員 人

駐屯地

戰鬥間の狀況及損耗

終戦後の人員變動

作業大隊より
入「ソ」迄の變動

入ソ入	隊別
計	

滿洲殘留

敗
敗

第二大隊

主力を以つては、長陣と落着
中
一ヶ所を除きを以て鶴宮附近
の國屋警備
殘部は寶清附近の野嶺に仁
じてゐた
寶清殘部はに近き少佐の指
揮下に寶清―物部―横道河
子と移動

解題せらる

大和鎮に派遣中の一ヶ小隊
約四五名は賣渡し勃利と行
屬八、一六頃驛隊本部に合
流す

杉浦中尉死亡

一林休及に
 ツ口禁しるは
 クに後たつ虎月
 一に東がた林九
 へり安不小に日
 向同に可林向
 う地向能見ソ

武たな以愛軍
解模り下ゝの
さ様軍二そ攻
れゝ獨十の軍
牡爾行名際を
丹後動並總受
江不をに口け
瀬明し一見正
成ゝ聯郡士午
作中區の以後
業出監下退
大は發視八命
區東後隊名令
に安一員はに
繼と八を残上
入經月收置り
さて十客後光
れ効三後衛商
て利日ゝとに
一山一本しあ
イ中虎駈てつ
んか林に前た
くらで追跡中

七

隊大一第
李行

隊大 一第
隊小砲兵步

隊長名

見士 大西 二郎

少佐 近藤和喜太
副官
少尉 三浦 七郎

清 寶

上 同

第

甲辰 福田 徳七
(戦死)

星 七

清：寒

中尉 金子 光威

登

...

ブラゴエ

第五軍

部
款
名

二 通稱號

郵便所名

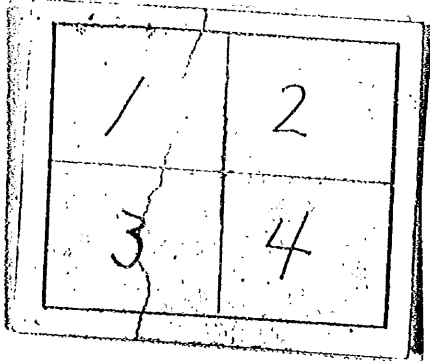
全般概要						第二大隊 主力を以つて七尾陣地構築中 一々中隊等を以て後河津迄の 砲臺警備 連部は奥平附近の警備に任 じてゐた 奥平砲臺には近衛少佐の指 揮下に奥平・物利・横道河 子と移動 八、二四 林口にて武裝 衝突せらる 大和嶺に派遣中の一ヶ小隊 約四五名は奥平・物利と行 動し、一六頃聯隊本部に合 流す ハムロフスグにて死傷者少佐 杉浦中尉死亡	
						轉入 十九年以降	
						轉出 十九年以降	
員入別綴							
第	第五中隊	第四中隊	第二本隊	第一行隊	第一歩兵隊	隊別	
	中尉 金子 光威	中尉 渡邊 典雄 (生死不明)	少佐 近藤和喜太 副官 三浦 七郎		見士 大西 二郎	隊長名 (内は先代を示す)	
						職階	駐屯地
清 寶	星 七	饒 純	清 寶			平時	
上 同	清 寶	上 同	上 同			戰時	
						戰鬥間の状況及損耗	
						終戦後の人員變動	
						作業大隊より入「ソ」迄の變動	
						拉古磯成隊 四五大隊 海林編成隊 四二大隊 (九、一〇) (長 近藤和喜太)	
						入「ソ」人員	
						滿洲殘留	

第	隊 中 五 第	隊 中 四 第	隊 大 二 第 本	隊 大 一 第 行	隊 大 一 第 歩	別 隊	隊 名
中尉 金子 光威	中尉 福田 徳七 (戦死)	中尉 渡邊 典雄 (生死不明)	少佐 近藤和喜太 副官 三浦 七郎		見士 大西 二郎	()内は先代を示す	隊長 名
清 賓	星 七	河 曉	清 賓			時 戦 闘 人 員 員	駐 屯 地
上 同	清 賓	上 同	上 同			時 戦 闘 人 員 員	駐 屯 地
	中隊長牡丹江ガード附近にて戦死	北山の一ヶ小隊は後退後消息不明 渡邊中尉が戦死 中隊長牡丹江ガード附近にて戦死	龍岡方面に戦死して小隊を残し、大層、 分隊、八千代村、中山村、水子に各一ヶ 分隊、大井山、東安側に各二ヶ分隊、泰山 に一ヶ小隊、大代側に中隊本部(約七〇七 〇)を配置す 開戦と共に大代側に集結し、一〇、〇三〇 〇附近に戦死し、一〇、〇三〇附近に戦死 附近にて戦死し、東安側に各二ヶ分隊、泰山 〇、約八〇附近に戦死し、水子に戦死し、 山中に戦死し、一〇月終りに戦死し、 水子、東安側の三ヶ分隊に戦死した。北 北山の一ヶ小隊は後退後消息不明 渡邊中尉が戦死 中隊長牡丹江ガード附近にて戦死			戦 闘 間 の 状 況 及 損 耗	終 戦 後 の 人 員 変 動
						作 業 大 隊 より 入「ソ」迄の變動 拉古編成第一四五大隊 海林編成第一四二大隊 (九、一〇) (長 近藤和喜太)	入「ソ」人員 隊 別 計
						滿 洲 残 留	收 容 所 名
						收 容 所 名	所 入 死 亡
						滿 洲 領 土 内 在 留 人 員	計 者 数
						計 者 数	計 者 数

(二) 通 稱 號

郵便所名

分割撮影ターゲット

分割した 部分の 撮影順序	
分割撮影 した理由	A 3 判 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	

部
隊
名

郵便所名

轉入	轉出
十九年以降	十九年以降

隱長名

時 戰 開
員 人

地 電 融

戰鬥間の狀況及損耗

終戦後の人員變動

作業大隊より
入「ソ」迄の變動

入「ソ」人員	豫別計
--------	-----

滿洲殘留

...

第三大除
主力は七層で薩摩軍患者
及初年兵は虎林に残留す

六、八 監國除攻撃を受け
之が撤退掩護のため虎林地
真陣地につく

八、一五、反日軍と、一六
「二」軍戰平、二二、反日
軍と夫々交戦し損害相當あ
るらしい。

九、二二の間に、虎林十粉
利十、遼大轉進し、二四、
林口にて武装解除せらる

第二大隊より福田、杉浦、中尉と混成一ヶ中隊が第三大隊長の指揮下に作業してゐた。

虎林より撤退した者は海林
で一三五大隊に編入
將校に佐藤新治郎少佐指揮
し將校大隊に編入

聖廟餘舊地

警備中隊(光岡一ヶ中)
向小隊(朗吟一ヶ小)に第
三大隊、各監視隊勤務者は
第一大隊より出る
に同監視隊員は警備一
師団の残兵(歩三大一聯
屬す)あり

一、二ヶ所の監視隊を除き
若干の死傷者を出したが他
は生還す

一、朗吟鼓の二ヶ小隊は器
行動にて八、九正午野地
二、三頃東安にて敵の包
圍を受け殆んど全滅四名の
遺者あり

隊別	隊長名 (内は先代を示す)	戦開人 時員	駐屯地	戦闘間の状況及損耗	終戦後の人員變動	作業大隊より入「ソ」迄の變動	入「ソ」人員 隊別計	満洲殘留
第二機關銃中隊	中尉 杉浦三郎 (死亡)							
第二行大隊								
第三本大部隊	少佐 佐藤新治郎 副官 武蔵勝治 少尉		虎林					
第七中隊	中尉 高瀬忠一							
第八中隊	中尉 小原貫一		七星	七星にて敵機襲撃中、八、九両中隊へ歩兵六九團の援軍下で、第一中隊を以てもとに、代り前進して、敵機を射撃に成功し、重傷を負わせ、其後敵機同様に曳き寄せられ、更に砲火と接撃、損害ある模様。				

トルソク

ヒロビシヤン地区
ロンドン第四收容所

部隊名										出降人員		以降人員	
部隊別										隊長名		(内は先代を示す)	
第二機關銃中隊										中尉 杉浦 三郎 (死亡)			
第二大隊													
第三大隊										少佐 佐藤新治郎 副官 武藤 勝治 少尉 藤 治			
第七中隊										中尉 高瀬 忠一			
第八中隊										中尉 小原 貫一			
駐屯地										平時		戦時	
戦闘間の状況及損耗													
終戦後の人員變動													
作業大隊より入ソの變動										入ソ人員		除別計	
滿洲殘留													
收容所										收容所名		收容人員	
死亡													
歸還人員										滿洲より		他より	
状況不明者数													

金剛經齊偈地區

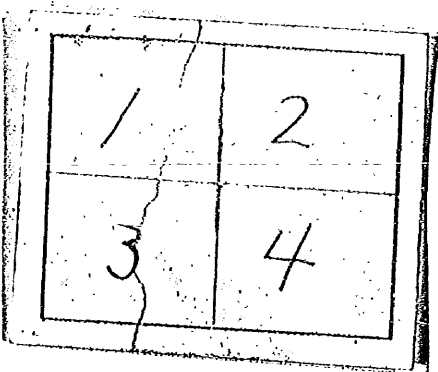
は生還す

七風にて陣地集結中、八、九兩回中斷（少
三六九專）の指撥下にて、第一工兵司令部の
もとに、代勇邊境附近に於て對戰準備隊に任
じ「ソ」軍機本と交換、東京鐵道局附近で
武裝隊取られ、更に露兵一隊拘と修職、預
めある真敵

金剛聖賢諸佛地蔵の尊像に凡そ光輝にあり
光輝より探進す所、細口に凡そ以下約五〇を
透徹し精細にありし小片凡そ以下約二〇、
並に一部の聖賢諸員を收得、本像に置及し
たが、道及不可能となり單獨行動にて尊像
出發せたらし。(一三) 虎井にて休養後東安
に向つたらし。

光輝の主力は茲に摩羅本部と同一行動す

分割撮影ターゲット

分割した 部分の 撮影順序	
分割撮影 した理由	A 3 判 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	

第五軍

部隊名

(四) 通稱 號

郵便所名

全般概要

轉入
十九年以降
轉出
十九年以降

員人別編

隊長名
(内は先代を示す)

戦開人
時員

駐屯地
平時
戦時

戦斗間の状況及損耗

終戦後の人員變動

作業大隊より
入ッ迄の變動

入ッ人員
隊別計

満洲殘留

收

隊中砲兵歩	隊中信通	隊大三第	隊大三第 隊小砲兵歩	隊中銃關機三第
少尉 村野 勝司	中尉 關 秀文		少尉 養父 幸太郎	中尉 小谷 武
			星 七	
	八、二四 林口市外大平路にて戦死			

九、一 海林にて一三八大
隊に編入
(長 岡本 善平大尉)

部隊名

隊中砲兵歩	隊中信通	隊大三第行	隊大三第歩 隊小砲兵	隊中銃關機三第	別隊
少尉 村野 勝司	中尉 關 芳文		少尉 養父 幸太郎	中尉 小谷 武	隊長 名 (内は先代を示す)
					戦 闘 入 時 員
					駐 屯 地 平 時 戦 時
			七 星		
	八二四 林口市外大平路にて武裝解除				戦 闘 間 の 状 況 及 損 耗
					終 戦 後 の 人 員 変 動
	九、一 海林にて一三八大 隊に編入 (長 岡本善平大尉)				作 業 大 隊 より 入「ソ」迄の變動
					入「ソ」人員 除別 計
					満 洲 残 留
					収 容 所 名
					収 容 所
					所 入 死 亡
					満 洲 領 土 領 土
					歸 還 人 員
					者 数
					状 況 不 明

(四) 通稱號

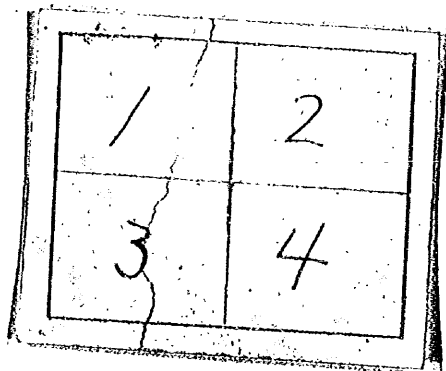
郵便所名

隊小馬乗	隊李行	隊中砲兵歩	隊中信通	隊大三第	隊大三第 隊小砲兵歩	隊中三
少尉 蓮池時也		少尉 村野勝司	中尉 關芳文		少尉 養父幸太郎	
					星七	
八、二四 林口にて武蔵解隊林口牧草を る			八、二四 林口市外大平山にて武蔵解隊			

九、一
海林にて一三八六
隊に編入
(長岡本善平大尉)

[illegible]

分割撮影ターゲット

分割した 部分の 撮影順序	
分割撮影 した理由	A 3 判 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	

真心 一五二五四(二)〇五三 聖使所名

收

... ..

第四卷

... ..

1. *Chlorophyll *a** and *Chlorophyll *b** were determined by the method of Arar and Collins (1971) using a Shimadzu 1601 UV-Visible Spectrophotometer.

2

Journal of Management Education 30(6)

1

真心 一五二五四二一〇五三

滿洲殘留

收容所

歸還人員

狀況不明者數

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
<http://www.jacar.go.jp>

[illegible][illegible]

七星作葉餘の約半畝（約六〇〇）は八、九代島郡附近の陣地につき、八、一二、〇八、〇〇一八、一三、〇四〇〇迄、戦斗部餘は混亂狀態に入る。

七屋作葉隊の殘餘約四五〇
 (第一、三大隊聯隊砲各半
 數加藤中尉指揮)に新た、
 に二ヶ大隊を編成、第一三
 六師團の指揮下に入り、彼
 等附近の陣地につく

八、一五 據河出發、八、
一八 橫道河子、途中、鮮兵
約二三〇餘、

八、一八 約二二〇横道河
子で武裝解除 八、二三
拉古は牧眷（二二〇名）
八、二六 作菜一六大隊（長
藤崎中尉）に編入

九、二一　ウオロシロフ地
區に至る他に樺林一ヘバロ
スクーライチヘロに造られ
たものあり

○終戰前に於ける部隊行
動、敵國境守備隊
第二大隊約三〇〇（含大
隊長、機關銃）

七星作彙隊
第一、三大隊、聯隊砲中、

本隊殘留警備隊
約五〇〇

大橋路勢難保衛（太刀花隊）
第二中隊 約二〇〇
隊兵は横道阿子にて全隊
擄亡した

第二大隊
第二中隊は大礪坂、坂地帯
監視哨、主力は牡丹江に接

選本部、各中隊殘留敵方
員と合して勦撃し横道河子
に接近

九主力に代り講に向ふ

3409 (20.7.10編成)

隊中第一	隊中第二	隊中第三	隊中第一
中尉 加賀谷信一	中尉 佐藤藤九郎	中尉 徳永 次郎	中尉 芝 昌元
右 同	安 東	橋 大	右 同
右 同	星 七	橋 大	右 同
	一節は田口大尉指揮の下に八、九第一工兵隊司令官佐々木大佐の指揮に入り代馬溝に轉進、一二四師團長の指揮下に入る 八、二七 北滿鐵にて武解	二〇、四、大橋園徳地帯監護隊（木刀花隊）として主力を派遣しあり 二〇、五、一〇 一節新立屯に派遣 八、八、大刀花隊の監護隊（約三〇名づゝ四隊）は約一〇〇名の戦死者あり 總勢約二〇は八、一九林口で武解解散する （監護隊は寶殿、大山、計同、鎌倉の四隊に）分かる	八、一五 東安にて整頓 九、六 冷出隊で武解解散 列軍にて横道河子に至り條件交渉所に收容せらる（他部隊を含み約八〇〇） 一節は田口大尉指揮下に、八、九第一工兵隊司令官佐々木大佐の指揮に入り、代馬溝に轉進第一二四師團長の指揮下に入る 八、二七 北滿鐵にて武解

三〇、六、一七 警察は、
 て送券六張を輸入（二七）
 三二六

一一、二五 牡丹江出發
一二、二三 ヤク下ニテ浴

九、一五 牡丹江發「イル
タープク」へ

海林第三大隊(長岡本
大尉)に歸入(仍舊)

隊中銃開機一第	隊中三第	隊中二第	隊中一第	隊六一第
中尉 加賀谷信一	中尉 佐藤藤九郎	中尉 徳永 大郎	中尉 芝 昌元	大尉 三浦 三三 大尉 三浦 三三 大尉 三浦 三三
右 同	安 東	橋 大	右 同	安 東
右 同	星 七	橋 大	右 同	星 七
	一部は田口大尉指揮の下に八、九第一工兵隊司令官佐々木大佐の指揮に入り代馬藩に轉進、一二四師團長の指揮下に入る。 八、二七 北嶺頭にて武解	二〇、四 大橋岡地帯豊福殿(大刀花隊)として主力を派遣しあり 二〇、五、一〇 一部新立屯に派遣 八、八 大刀花隊の豊福殿(約三〇名づゝ四隊)は約一〇〇名の戦死者あり 豊福殿二〇は八、一九林口で武裝解除さる (豊福殿は豊家、大山、初岡、鎌倉の四隊に)分かる	八、一五 北嶺頭にて武解 九、六 大山嶺にて武解 列軍にて筑前藩手に至り松林牧場所に收容せらる(他各隊を含み約八〇〇) 一部は田口大尉指揮下に、八、九第一工兵隊司令官佐々木大佐の指揮に入り、代馬藩に轉進第一二四師團長の指揮下に入る。 八、二七 北嶺頭にて武解	八、二五 北嶺頭にて武解 九、六 大山嶺にて武解 列軍にて筑前藩手に至り松林牧場所に收容せらる(他各隊を含み約八〇〇) 一部は田口大尉指揮下に、八、九第一工兵隊司令官佐々木大佐の指揮に入り、代馬藩に轉進第一二四師團長の指揮下に入る。 八、二七 北嶺頭にて武解

大分県大分市、三三三の会（091100）が、環境省環境政策課（11100）の指導により、

八、一五、五安にて終戦　九、六古山驛で雲
霧遮る。列車にて横濱河子に至り森牧牧寮
所に牧歌せらる。(牧歌聲を合み約八〇〇)
一部に田中六尉指揮下に入、八、九第一工兵
隊司令官佐々木大佐の指揮に入、代馬溝
に轉送第一二四師團長の指揮下に入る
八、二七北湖頭にて武解

二〇、四、大隈國策地帶監視隊（太刀花隊）として主力を派遣しあり
として、五、一〇、一部新立屯に派遣
八、八、太刀花隊の監視隊（約三〇名づゝ
四隊）は約一〇〇名の戦死者あり
建前約二〇には、八、一九林口で武裝解除さる
（監視隊は費策、犬山、新岡、鎌倉の四隊
に）分かる

一節は田口大尉指揮の下に八、九第一工兵
隊司令官佐々木大佐の指揮に入り代馬蔭に
轉進、一二四師團長の指揮下に入る。
八、二七 北滿嶺にて武解

[illegible]

二〇、九、一七 海軍に於て岩井六郎に二八（一七）
五二六

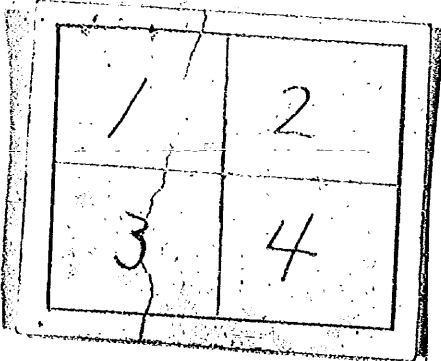
一一、二五 社丹江出登
一二、二五 ヤクドニヤ着

九、一五 牡丹江發「イル
ターラク」へ

海林第三大隊、長岡本
大尉、九歸入、約九口也

ニムソモリスク一八
地處
第四收容所
(田口大尉 芝中尉)

分割撮影ターゲット

分割した 部分の 撮影順序	
分割撮影 した理由	A 3 判 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	

郵便所名

收

より武裝解除され一一、
國、咸興刑務所に入る
三七〇聯の約七〇名と共

監視を約十ヶ所に出す、堂壁録（石上見
日影より戦斗武解迄中絶と別行動する、戦術入

ウ
グ
ロ
シ
ア

一、一〇 大隊主力は聯隊方と共に東京出發 三、四種物料に到着物料は、連軍の反亂にあつたが、猶ほ、その殺人隊は黄地に依り牡丹江に向ひ途中、城郭附近に於て、鐵鎗七挺の損傷を受けたやうである 四、約四〇〇頭、うち二大頭約一〇〇頭、は吉黒武裝部隊以下約二〇〇、うち三二頭約六〇名、勃利に二一頭、後衛隊主力を遣及、途中、天分點して、

中隊以下約一〇名、京鎮にて一〇、中知保安隊より武裝解除せられ一二、成興武裝所に入る 三、七頭、約七〇名と共に

開戦時は三稜屯にあり國境監視を約十ヶ所に出す、當壁嶺（石上見）
 以下一ヶ小隊、八月九日朝より戦斗武解迄中隊と別行動する、
 死大英、負傷九名、八月九日朝より戦斗、負傷二名
 長殿英、佐々木見士以下約一ヶ小隊、寶塚監視を併せ指揮して、
 八月九日中に合流、その他太刀花隊と共に行動、八月十六日林口で戦斗、
 死二名、九月四日冷山で武解、第六中隊約百名一行方不明約百三十名

隊大二第	隊中六第	隊中五第	隊中四第	隊大二第	隊六一第
隊小砲兵歩				隊部	
中尉(兼任) 三浦 勝松	中尉 川崎 誠	中尉 三好	中尉 片桐 寅松	大尉 岩井 克美	
約 20 (馬14)	約 250	約 250	約 250	約50	
院大宗	屯通校三	右 同	右 同	嶺 廟	
				嶺 廟	
	戦八死十開 死月後大以 二九中英名 名日に佐負 九中合々傷 月隊流木九 四は見名 日集その士 在結他以下 山し、太一 で武大ケ 解敵花小 衆と闘小 六共闘小 中に家八 約行監月 百動、九 名八日 行月朝 方十六 方六十 不日併 明林せ 約口指 百口揮 三十で 名戦 斗 い た 名	一隊(テ分隊)は廟嶺にて戦ふ	見士を以てする一テ小隊(各隊より二〇、三〇名を抽出編成)は海軍側で交戦(八、九)傳令の報告によれば奥敵より猛進射撃を受ける試みしたらしい。	丹根中尉以下五二名古林で解散	二〇、八、一七海軍にて一四七六隊を編成(長 岩井克美大尉)
					ウクロシロフ

中尉(兼任) 三浦 隆松	中尉 川崎 誠	中尉 三好	中尉 片桐 寅松	大尉 岩井 克美
約 20 (馬14)	約 250	約 250	約 50	
院大宗	右 同	右 同	嶺 廟	
			嶺 廟	

中尉(兼任)
三浦 隆松
中尉 川崎 誠
中尉 三好
中尉 片桐 寅松
大尉 岩井 克美

見士を以てする一ヶ小隊(各隊より二〇、三〇名を抽出編成)は、軍機部で交戦(八九)命令の報告によれば、真鍮より遠距離射撃を続け全滅したらしい。

一部(一ヶ分隊)は、崩壊に際して戦死。

戦死者に内ふ中、代馬隊にて戦死、戦死約三

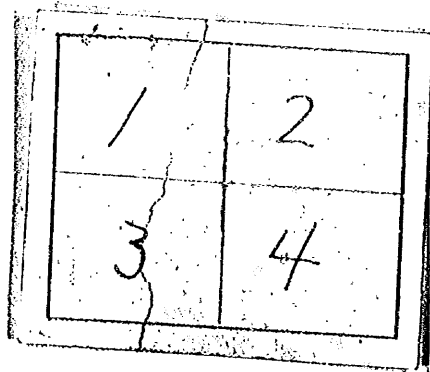
片桐中尉以下五二名古林で解散

二〇、八、一七森林にて一
四七大隊を編成
(坂 岩井克美大尉)

海軍第一二五大隊編入
スナール、特選

ウクマシロフ

分割撮影ターゲット

分割した 部分の 撮影順序	
分割撮影 した理由	A 3 判 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	

郵便所名

for
http://w

公文書館
Japan Center
http://

国立公文書館
Japan Center
http

隊名	別	隊中銓開機二第	李行隊大二第	部本隊大三第	隊中七第	八第
隊長名 (内は先代を示す)	開人	中尉 三浦 勝松 小隊長 松田 利照 少尉 松田 利照	見士 長 夫美男	大尉 阿部 勝太郎	中尉 向井田 穆	中尉 加藤市太郎
戦時	駐屯地	約200	約200	約180	約180	約180
平時	戦時	嶺 廟	右 岡	安 東	星 七	右 同
戦時	戦時			星 七	溝馬代	星 七
戦闘間の状況及損耗		三浦中尉の増補する混成一中隊は第三大隊と共に作業に従事 一ヶ分隊を第六中隊に配属			七尾陣地構築中八、九、第一工兵司令部の指揮に入り代馬陣附近にて對戦車防禦に任ずる爲、轉進し、第三機降地につき突撃、第二四師團長の指示下にある	
終戦後の人員變動						
作業大隊より入「ソ」迄の變動	入「ソ」人員	第一四七大隊に編入		一部は、八、二一、東京城に於て第七二二大隊に編入 (長 海老子川中尉)		八、二六作業第一六六隊編成 (長 加藤中尉)
隊別	計					
満洲残留						
收容所	收容所名	收容所名				
所入	員所入	員所入				
死亡	死亡	死亡				
満洲より	満洲より	満洲より				
領	領	領				
計	計	計				
者	者	者				
状況不明	状況不明	状況不明				

(三)

通稱號

郵便所名

隊 中 九 第	隊 中 八 第	隊 中 七 第	部 本 隊 大 三 第	李 行 隊 大 二 第	
中尉 西口	中尉 加藤市太郎	中尉 向井田 穆	大尉 阿部勝次郎	見二長 矢美男	
約180	約180	約180		約200	
右 同	右 同	星 七	安 東	右 同	
溝馬代	星 七	溝馬代	星 七		
主力は海老子川中尉（三八八聯）の指揮下に入り、第一工兵司令部のもとに、代馬溝にて陣地構築、戦車防禦に任ず。		七尾陣地構築中八、九、第一工兵司令部の指揮に入り代馬溝附近にて戦車防禦に任ずる爲、砲臺し、第三陣地につき直進、第一二四砲臺長の指示下にあリ			

一部は、八、二一、東京城に於て第七二大隊に編入
（長 海老子川中尉）

八、二六作業第一六大隊
（長 加藤中尉）

パロディンヤン四六
地区第四分所
（向井田中尉）

隊 中 九 第	隊 中 八 第	隊 中 七 第	部 本 隊 大 三 第	李 行 隊 大 二 第
中尉 西口	中尉 加藤市太郎	中尉 向井田 穆	大尉 阿部勝太郎	見二 長 夫 夫 男
約180	約180	約180		約200
右 同	右 同	星 七	安 東	右 同
溝馬代	星 七	溝馬代	星 七	
主力は海老子川中尉(三六八聯)の指揮下に入り、第一工兵司令部のもとに、代馬溝にて陣地構築新機銃防禦に任ず		主陣地構築中八、九、第一工兵司令部の指揮に入り代馬溝附近にて對戦車防禦に任ずる爲、陣地し、第三機銃連隊につき攻撃、第一二四師團長の指示下にある		

一部は、八、二一、東京城に於て第七二六隊に編入
(長 海老子川中尉)

八、二六作戦第一六大隊
(長 加藤中尉)

パロビジャン 四六
地區第四分所
(向井田中尉)